

針葉樹会報

1990. 1. 第74号



<p>発行日 1990年1月16日</p> <p>発行所 針葉樹会</p> <p>印刷所 篠田印刷</p>	<p>針葉樹会報</p> <p>第74号</p>	<p>編集人 〒194-01 町田市三輪緑山1-17-13 近藤 泰</p>
---	--	--



<p>————— 目 次 —————</p>	<p>利尻山と「大塚レリーフ」行……………望月 達夫 2</p> <p>中樹会の乗鞍木立山荘と 徳本峠紀行……………中村 正司 6</p> <p>鳥甲山近況……………山崎 抔 7</p> <p>初秋の鹿島槍……………西牟田 伸一 8</p> <p>会務報告……………11</p> <p>針葉樹会昭和63年度決算報告……………12</p> <p>一橋山岳部の現状について……………西牟田 伸一 13</p>
--------------------------------	--

表紙写真（五月の剣岳八ツ峰）は加藤博行氏撮影

利尻山と「大塚レリーフ」行

望月 達夫

一、「大塚レリーフ」のこと

大塚武さんの慰霊碑（レリーフ）のことは、『如水会々報』第七一四号（平成元・10月号）に短文と写真とを寄せたので、読まれた方もあろうかと思うが、ここにはもう少し詳しく述べておきたい。

レリーフが設置されたのは、大塚さんが神威岳で遠逝した翌年、即ち昭和五十九年八月上旬（除幕式の行われたのは十一日）で、場所は彼の最後の野営地となった元浦川源流ニシユオマイ沢、上の二股付近の岩盤（片麻岩角閃石）であった。日本山岳会々報「山」四七二号（昭59・10月号）にはJAC北海道支部報告として、その時の模様が記載され、レリーフの写真も出ているので、本会員中のJAC会員は記憶されている方もあろう。ただ本会員でJACに入会している方は案外少ないので、大塚レリーフについて、全く知らない方も多いであろう。私が『如



神威岳の大塚武さん慰霊碑（浅利欣吉氏撮影）

水会々報』に寄稿したのも、それが理由の一つだった。

またJAC北海道支部報『ヌプリ』十四号（昭59・8月刊）にも、右よりやや詳しい記事と写真が載っており、その号はまた大塚さんの追悼号として編集され、当時のJAC会長佐々保雄さんほか数名が追悼文を寄せている。

大塚さんが請われてJAC北海道支部長に就任したのは昭和五十年四月だが、爾来亡くなる迄の八年間、彼は支部のために実によく尽くしたようである。例えば、ペテガリ岳とかカムイエクウチカウシなどで多数参加の懇親登山を挙げたが、ペテガリにしてもカムエクにしても、大勢のパーティーで懇親登山をやるには、かなりむづかしい問題があった筈である。それを彼らしく大胆にのり切ったのは、支部会員の絶大な協力があったからに他ならないが、運もよかったのだと思う。私は両方共に参加したが、カムエクのときは佐々木誠さんと一緒に行った。日高山脈の中央にいまなお孤高を誇るこの山の頂に、二十四名もの仲間が同時に立ったのは、おそらく初めてのことでなかったろうか。このように支部の活動が盛り上がったのは、彼の指導によるところが大きかったと言えるだろう。

また彼は、北海道岳連によるミニヤコンガ日中友好登山に際して後援会長となり、肝心な資金集めに多大の貢献をした。だが不運にもこの隊は遭難者を多く出し、登頂できなかったのだが、その困難な後始末にも彼なりに誠意を尽くして対処した。ついで北大山岳部・山の会の厳

冬期ダウラギリ登山隊に対しても、彼は募金活動で大きな協力をした。これらの北海道岳界に対しての彼の貢献度は、多くの岳人に強く印象づけられた。

こうした背景が彼の遭難時に多くの救援の申し出となり、またその没後には彼を慕う支部会員たちの心をレリーフ設置に向かわしめたようである。

レリーフ製作者は金子春雄氏で、金子造型研究所長であり、また元札幌山岳連盟会長、元北海道山岳連盟会長でもあって、ミニヤコンガ登山隊総隊長もつとめ、その当時大塚さんに大変世話になったことから、この製作を申し出られたという。碑文は横書きで

こよなく山を愛せし
大塚 武
1917-1983
ここに眠る
1983年 8月29日
追悼 日本山岳会北海道支部
武井 正直

となっている。武井さんは北洋銀行社長で、文字は武井さんが書かれた。以上がレリーフそのものと、設置までの経緯の概要である。

二、利尻山

さて話はかわるが、私には北海道内にも、まだ幾つか登りたい山があった。利尻山もその一つ。それを知っていたJAC北海道支部の高沢光雄、水科行雄さんらが今夏(平成元年)、利尻登山を企画して下さった。ところが今年は偶々大塚さんの七回忌にもあたっていたので、支部会員の多くはレリーフの前でご供養をしたいという意向も強く、それが支部行事として七月二十九、三十日と決定された。

そんなわけで私が利尻へ行くなら、神威の慰霊山行にも加われるように按配して、利尻行は七月二十六日、二十八日と企画され、この方は支部の有志山行となった。

こういう連絡をうけたので、利尻山は私のかねてからの希望であり、また大塚レリーフは一周忌の設置時に行けずに心にかかっていたことでもあったので、佐々木さんにも声をかけたら彼も是非、ということと一緒に参加することになった。

七月二十五日、私は空路札幌へ行き、夜行列車で稚内へは二十六日の早朝に着いた。そこで先に大雪山を登ってきた佐々木夫妻、利尻山だけに同行したいという私の友人、岡田さんや北海道支部の面々と合流した。この行の肝煎りをやってくれた水科さん、旧知の高沢、浅利欣吉、平野明、河村皆子さん、三十年振りに同行する石崎貞子さんらの懐かしい顔に接した。

船は宗谷丸という一千噸以上の立派なもので、三十年前深田久弥さんらと来たころの船とはケタ違いに大きい。晴天で波はおだやかだったが、残念ながら利尻山はガスで見えなかった。一時間十分で鴛泊港に着くと、かねて水科さんが連絡してあった利尻町立博物館学芸係長西谷さん、在鴛泊の河野さんらが、トラックを出してわれわれの荷物の世話をし下さり、且つ登り口であるポン山近くのキャンプ場まで車で運んで下さった。そこから登りにかかったが、一行は地元の河野さんら二名を加え十五名だった。

登山道はよくできており、アキノキリンソウ、オトギリソウ、イワギキョウなどの花に慰められたが、重荷の人が多かったので長官山の利尻岳避難小屋まで約五時間かかった。今日は下方は晴天で、途中から海岸線や鴛泊、沓形の町やはる

かに礼文島まで眺めえたが、千メートルを超えると強い南西風を受けるようになり、ガスが吹きつけてきた。長官山の辺りは南西風の通路にあたるのか、よろけるくらいの強風で、ガスのための視界はせまかった。岡田さんと共に一等三角点本点(一二一八・三m)まで行って小屋に落ち着いた。

夕食はコンビーフを入れたカレーライス、久々に寝袋に入って八時にはねむりにおちた。その前小用に表へ出たとき、ガスの切れ間から下界の町の燈が実に綺麗だった。

七月二十七日、五時に外へ出てみたが、昨日と同様な南西の強風が吹きつけていた。山頂は無論見えない。十一名が山頂まで登ることとなり軽装で六時三十五分に発足した。強風は小屋の辺りがいちばんひどかったが、屋根の曲り具合では思ったほどのこともなかった。道ははっきりしているが、泥濘のところがあったり、また滑り易い所にはロープが張ってあった。一旦少し下ってからのはぐんぐん登る。ガスで視界がせまいためよく判らないが、右手は急勾配で谷に落ち、左側の方が幾分傾斜がゆるいようだった。二、三度息をしずめるため休んで、沓形コースの分岐につくと、山頂はもう近いようだ。

最後に北西側が切れ落ち、強風が吹き上げてくる個所を過ぎると、山頂の小さい神社が見えてきた。私が最年長者ということで、一番先に神社の前まで登り、全員が揃ったところで罐ビールで乾杯した。山頂まで約二時間かかり、十分ぐらい休んで下山の途についた。

小屋に戻って三十分間にパッキングや掃除、休憩をして往路通りの道を下った。「甘露水」のすぐ上の東屋風の休憩所でゆっくり休み、その下から車で駕泊の民宿みさき荘へ戻ったのは二時四十分。下界は風は強いもののよく晴れていた。一息いれてからベシ岬の上まで数人で登った。そこには九三・二mの一等三角点補点がある。簡単に登れてポンモシリ島、富士岬(古い五万図ではアシリコタン)、野塚岬等を眺めた。六時からの宴会には西谷係長、町役場の小杉さん、地元の河野さんらも加わり九時過ぎまで愉快に歓談した。

七月二十八日、五時ごろめざめたら、もう北の国の太陽は高い。今日は快晴で、山頂にかかっていた雲も七時ごろには完全にとれ、利尻山の全体がよく見えた。帰途の宗谷丸の甲板からもよく見えて、それがしだいに小さくなって行った。礼文島も樺太も今日ははっきり見えた。

岡田さんとは稚内で別れ、あとは車三台に分乗し、札幌に戻ったのは七時を回っていた。予定通り利尻山へ登れたのは、まったく支部会員諸氏のおかげであり、私は心から感謝している。

三、「大塚レリーフ」行

翌七月二十九日も幸い天気はよかった。佐々木夫人は帰京の途につき、佐々木さんと二人で神威岳の慰霊行に加わった。利尻へ同行した仲間も少なくなかったが、新たに橋本誠二支部長、新妻徹、芳賀孝郎、小林年、山川力、三浦勝幸さんなどの旧知の友人が加わった。

午後一時過ぎ札幌を水科さんのマイカーで出発し、富川、新冠、静内、三石と走るころ、左手はるかに日高山脈の青い連なりがよく見えた。様似とのほぼ中間の荻伏から元浦川沿いの林道に入り、北進を続けてシロカンベツ沢出合の下流にある元浦川造林作業小屋へは五時半近くに着いた。浦河営林署からは大塚さん旧知の二人の方が参加され、小屋内が清掃されていたばかりでなく、敷物まで新しくされていたのには、一同感謝のほかなかった。

同夜は参加された嗣子謙一さん、令弟の木村康宏さんも加わり、河村皆子さん、木下恵子さ

んが腕をふるってつくられた石狩鍋の夕食後も、おそくまで思い出話が尽きなかった。

三十日、朝の小雨も幸いあがって、林道をさらに四十分、車を走らせたあと、地下足袋で歩き出したのは七時四十分、間もなくニシユオマイ沢の徒渉となる所でワラジをはき、右岸にわたると、そこに古い歩道があった。ここも今回、営林署で藪を刈って下さったので通れたわけで、藪がひどい時は沢通し歩かなくてはならない。

約一時間、歩道があるいて中ノ沢の沢縁に下り、そこから沢歩きとなって、何度か簡単な徒渉をくり返し、一時間後に目的地の上の二股に着いた。

一同でレリーフの周辺を清め、持参のお花、酒、菓子、果物を供えて黙禱し、銘々がお焼香して碑前での行事を終えた。一行中比較的若く元気な人十一名は謙一さんも加わって、神威の山頂まで行くという。ここからはまだ、四、五時間はかかるし時刻は既に十時だった。私は佐々木さんと共に年齢を考えて思いとどまり橋本、小林、平野、浅利、木村さんら数名と残ることになり、碑前で三時間ぐらいゆっくりして、つくっていたいたいたソーメンや六華亭の菓子などを食べながら、あたりの景色を眺めたり、レリ

ーフに何度も目をやったり、友人たちと話したりした。

午後一時、もう一度お焼香してレリーフをあとにし、最後の徒渉を終ったところで、濡れたズボンを乾かしながら、また長いこと休憩して車置場に戻ったのは五時半だった。登頂組が戻ったのは七時で、あたりは薄ぐらくなっていた。ここで銘々お別れの挨拶をかわし、私たちはまた水科さんの車に厄介になって、七時をだいぶ回ったところに帰途についた。

途中、富川で夕食をし札幌のホテルへ戻ったのは十二時四十五分、運転された水科さんは山頂まで行ったので、さぞ疲れたろうとその労に心から感謝して別れた。

佐々木さんとは三十一日の午後の日航機で帰京した。

(付記一) 大塚レリーフのある所へは、マイカーでないと行きにくい。札幌を早朝に出れば日帰りも可能だが、車の終点から先には道標の類は皆無だから、誰方が知っている人と同行することが望ましい。

ここに掲げたレリーフの写真は、浅利欣吉さんの撮影されたものである。

(付記二) 大塚さんのあとに支部長となった北

大山岳部OBの橋本誠二さんは、大塚レリーフ設置に際し、重量約八キロのレリーフを一人でかついで、二時間以上も沢を遡行されたそうだった。

橋本さんはまた、私が曾て札幌に勤務中、北海道のいい山へ連れて行ってくれた友人で、彼なくしては私の北の山はあり得ないと言ってもよい程である。その彼を、私の札幌への転勤に際して紹介してくれたのは、同じ北大山岳部出の林和夫さんだったが、林さんはまた大塚さん遭難時に一番心配してくれた友人でもあった。

その林さんが、こともあろうに大塚さんの没後一カ月の九月二十五日午後、自動車事故のため忽焉とわれわれの前から消え、またその葬儀の行われた日の前夜「ぼくは風邪をひいて林君の葬儀に出られないから、よろしく頼むよ」と電話をかけてきた折井健一さん(早大山岳部OB・私と二年間JAC副会長をつとめた)が九月二十九日に急性心不全で亡くなり、さらにネパール・トレッキングに出かけた中島孚さんが発病されて、カトマンズの病院で十月二十日に急死されるというような不幸なことが次々に重なって、昭和五十八年という年は、私には忘れがたい年となった。

(一九八九年十一月記)

中樹会の乗鞍木立山荘と

徳本峠紀行

中村 正司

日程：89年9月29日～10月1日

参加：佐藤、望月（敏）（25卒）、小泉（27卒）

鹿俣、渋谷、中村（28卒）以上 6名

漸く転勤のない身分となった仲間が今年9月下旬、三十六年ぶりという者も含めて、北アルプスを眺めに行こうということになった。

〈中樹会という呼び名は〉

何時とはなしに、横山皖一（前針葉樹会長）

さんの宇佐美別荘で毎年晩秋の夜、焚火を囲んで痛飲したり、翌日天城ハイキングを続けているうちに生まれた呼び名である。最近家主が日本語の教師としてスリランカに行ってしまったため、致し方なく重い腰を上げ、「自主プラン」でこの数年、程度の低い山行を重ねるようになった。針葉樹の中年組を意味した甚だ心もとない年代である。

〈今更驚くタクシーの攻勢〉

我々の頭の中では、バスを乗りついで昔ながらの素朴な旅を考えていたが、新島々を下車するや否や、最後にそこへ帰りつくまで、つまり電車の走っていない山道は凡てタクシーのすごい誘いに遭い、気弱な仲間は遂に全行程バスに代えてタクシーの世話になることとなった。

だが運ちゃんのお誘いの言葉を聞いていると誘惑に乗らない方がおかしい。3人ずつなら「1人当りのバス代でいいよ」、「バスより速いよ」豊平などでは「3時間でも待っているから帰日も乗ってよ」

なかなかもって有難い勧誘だ。発車時間に気づかひながら行動することを考えると遙かに便利だ。山でのバスの最終時刻は意外と早い。お陰で白骨温泉も見物できたし、乗鞍富士見岳ではゆっくり槍・穂高を眺めることが出来た。

〈木立山荘での思わざるでき事〉

番所に「木立山荘」あり、元一橋教授中村為治氏が戦後移住、今ではご子息礼治ご夫妻が経営している。ご長男の讃治さんは針葉樹会員（若くして亡くなられた）だったこともあり、山岳部現役時代からよく耳にしたものである。数年前には高崎の故中村幸生君の追悼登山でも多数泊って露天風呂を楽しんだ。

然し伝えられる話はいずれも冬山で挨拶に立ち寄った際、為治氏にひどく「叱られた」ような類いのものが多い。我々が訪れるに当たって、石井針葉樹会長のアドバイスもいたなきながら、「ノリ」をおみやげに、至極かしこまりながら、別棟で「莊子」を翻訳中の先生に挨拶をした。書齋から顔を出された元教授は92才ながら至極お元気で、我々「山岳部OB」（勿論個人名など関心ない）に対し最近発刊した「楽しい自叙伝」を賜った次第である。伝説とは逆に歓迎して戴き、「厚さ7cm A4版875頁の大書とその重さ」と感激とを背負いながら上高地をさまよった次第である。

〈徳本峠からの穂高〉

6人の中で徳本峠越えの機会を持ってなかった者がいた。「一生の想い出に」というたつての

希望もあり、全員明神から往復付き合うことになった。還暦を過ぎた者同志の思い遣りでもあるが、やはり島々からはるばるたどった若き日の感激をいま一度という気持ち、或いはもう二度と来れないかも知れないという感傷、各人様々

のものがあつたに違いない。峠では西穂山頂は帽子雲をかぶっていたが、その偉容を心ゆくまで味わうことが出来た。

行くとのこと。自家発電の宿では夕方の5時から9時までの4時間だけ電灯がつく。それ以外は闇である。外人達の朝食（パン）のために特別発電サービスしていた。山も国際化時代を迎えたようだ。

鳥甲山近況

山崎 拡

何しろアプローチの不便な山なので、土、日利用ではどうにもならず、この文化の日の三連休で漸く念願を達したので、近頃の様子を書いてみます。

交通は、列車の場合越後湯沢から野沢行バスで津南へが最も便利。しかし津南から秋山郷へのバスは最奥の切明まで行くようになったというものの、一日三本しか無く結局一日がかりの旅となってしまう。

登りは和山からスタートしたが、中津川の橋は流されており、徒渉を余儀なくされる。また上の林道へ出るまでも踏跡程度で迷いやすい。登山のメインルートはこの林道を車で来て、登山からすぐ登りにかかるもののようにだ。この

林道は砂利道ながら奥志賀スーパー林道まで通じており、車の往来が相当頻繁であった。

登山口からの路は良いが、急登は昔の通りのようだ。しかし、岩場には新しい鎖やワイヤーが取り付けられ危険は少ない。とくに、難所といわれた「かみそり岩」は、基部をトラバースするルートに変っており、以前の梯子ルートでは無い。その日はまた二〇cm程の積雪があつて、先行パーティーが大きなステップを切ってくれていたので何なく通過することができた。

この点は現行のガイドブック等の記述にも古いものがあり、また地元の宿でさえ「ハシゴの辺りが悪いから気を付けて」など言っており、あまり知られていない様子であった。

むしろ悪いのは降り。屋敷への路をとつたが、

長い急な下りのうえ雪どけですべり易く、靴やズボンも泥だらけとなる。さらに駄目押しとなるのが、最後の標高差五百米ほどの降り。路形も不明瞭な沢筋で、岩や木の根が深い落葉に埋り、そろそろ踏み堪える力の無くなった脚では、何回も滑ったり、尻餅をついたり。ここだけで二時間もかかってしまった。

登山者も少なく、相変わらず「静かなる山」ではあるが、この降路だけはいただけない。屋敷の宿へ着いたときは夕暮で、ズボンの洗濯や靴の手入れが忙しかった。

とはいえ、登りには適度なスリルもあり、苗場や上越の山々の眺望、スキークースで虎刈りの悲惨な志賀の山の姿もよく見えた。またちようどん季節の茸の数々や、長いバス待ちの津南で旨い手打そばを見つけたなど、食べるほうでも満足のゆくものでした。

初秋の鹿島槍

西弁田 伸一

10月9日、山岳部の新入生二人と鹿島槍をアタックした。以下この時の報告をする事にした。最初にメンバー及び行程を記しておく。

メンバー 西牟田伸一 42才、
天羽康之 21才 一橋山岳部 1年生(経験なし)、
古田 茂 19才 同 右 (川越高校で山岳部)

10月8日 16:30 大谷原より入山

大冷沢、昭電取り入れ口にて幕営

10月9日 4:00 起床、5:40 テント出発

6:10 西俣出合、7:55 高千

穂平、9:20 冷池小屋、10:40

布引岳、11:25 鹿島槍南峰着、

12:00 鹿島槍南峰発、13:00

冷池小屋、14:10 高千穂平、15:

20 西俣出合、16:00 テント着

10月10日 6:00 起床、8:00 テント場

出発

今回の山行は私の発案に学生二人が乗って来たものである。私のアイディアはたまたま大町まで行く用事が飛び石連休の8日に出来た機会を利用して、久し振りに初秋の後立山を楽しみたいと言うものであった。

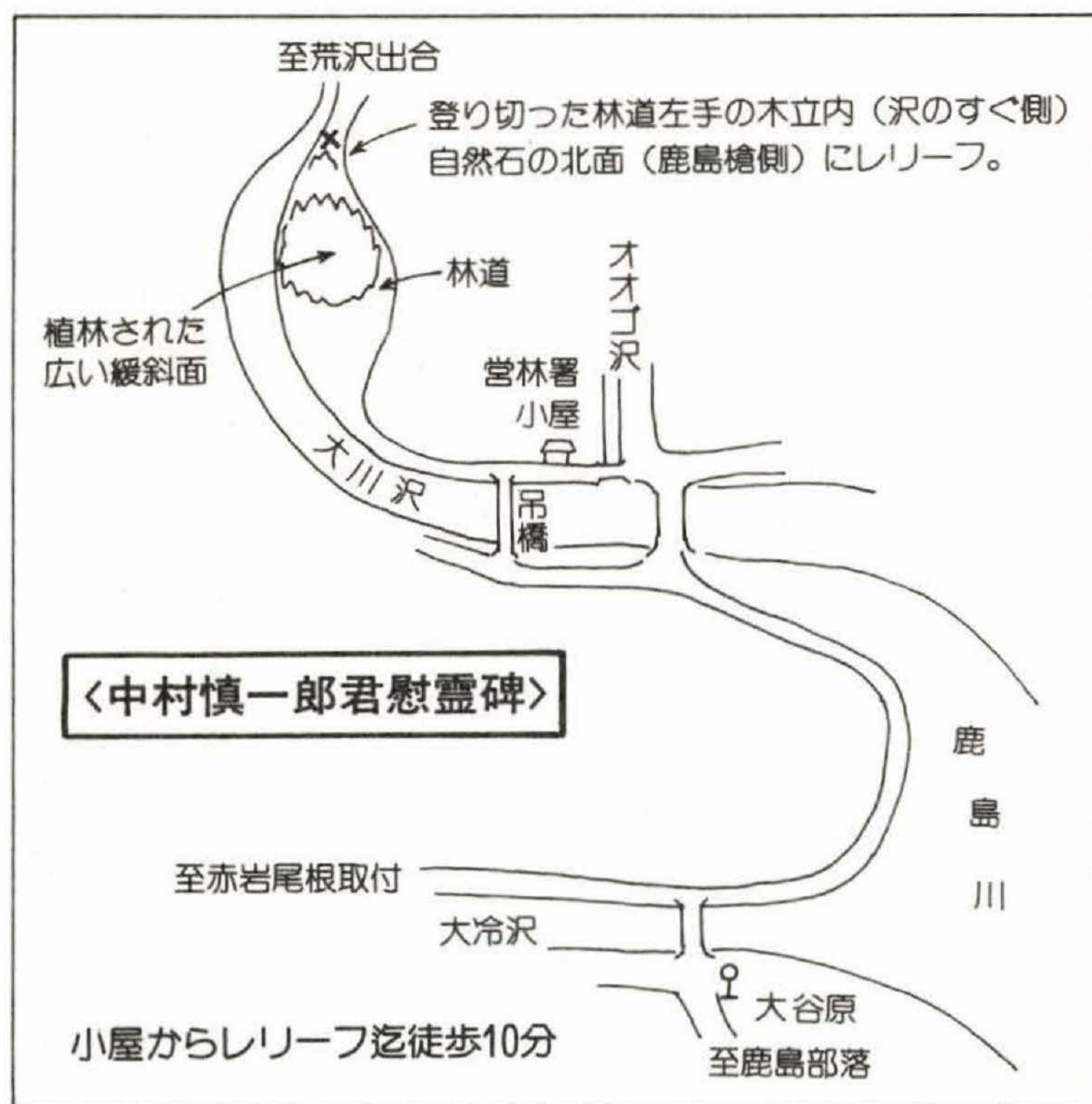
この大町の用事とは先輩の倉知さんが紹介してくれた「大町アルプスマラソン大会」30kmの部への出場であった。倉知さんと私、金子、加藤(博)、佐藤(活)等の針葉樹会員と金子の仕事上の友人達は「パレス水走会」と名乗り、毎週水曜日に皇居の周りを走っており、様々な競技会に出場している。この会のこと及び私のジヨギング論については稿を改めて、次回以降の会報に掲載させて戴く事としたい。

当初計画には学生を連れていく(あるいは連れて行って貰う)等のアイディアはなかった。ただ頼みにしていた加藤君が仕事上どうしても大町に行けない事になり、倉知さんも9日には出勤しなければならなくなって、同伴者がいなくなってしまうた。我が女房も単独行は許さぬと言いつ張り、私自身も何度かの奥武蔵単独行で不安を感じていたので計画は暗礁に乗り上げた。そこで目をつけたのが7月入部以来北岳の訓練山行以外の部活動をしていない二人である。

リーダー内藤君の小川山での転落事故については本会報上の別稿にあるので省略するが、停滞している現在の一橋山岳部の今後がどうなるかはこの二人の肩にかかっていると云って良い。そんな大事な二人を一OBの楽しみに起用するなどは不遜と言われるかも知れない。しかし、今の山岳部を導くべき若手OBの枯渇は深刻である。卒業後15年も過ぎた加藤君あたりが会の学生担当を引き受けなければならぬのである。私如きが新入生に山の楽しみ方だけ教える役を引き受けたとしてもおかしくはない。これを今回の山行の目的の第二にあげたい。

今回の山行の目的の第三は私の現役時代の同僚であった中村慎一郎のレリーフ訪問であった。思えば昭和43年5月、鹿島槍天狗尾根から転落死した同君を慰霊する機会は現役時代に何度か訪れた鹿島槍北峰での山讃賦しかなかった。レリーフ設置は俵先輩まかせにして一度も訪問したことがなかった。俵さんに電話で話を聞き、大体の設置場所を頭に入れた。

以上のようないささか欲張りの誹りを免れ得ない目的を持って今回の行動は開始された。もつとも、計画の大筋が決まったのは出発前日の6日の事であった。それはもう一人の参加者を



めぐってであった。一人は柿原大先輩の御子息で千葉大学助教授の和夫さん。和夫さんはマラソン大会に同行され10kmの部に出場された。一時、私の計画に賛同されランニングの後の山行を楽しみにされていたが、急に仕事の都合が入ったのが残念であった。

もう一人は前述の「パレス水走会」の会員でブラジル航空にお勤めの田崎さん。この方は私より8才年上ではば倉知さんと同年令であるが、お元気な方で最近の私の山行はこの方との同行が多い。(2年前の木曾駒、昨年平標、甲斐駒

に同行願った)又、3年前には針葉樹会の懇親山行、奥秩父にも参加されている。この方も同行不能となって、ようやく計画の大筋が決まったのである。

前日のマラソン大会は今シーズン初の冬型気圧配置の下、冷たい雨のなかで私としてはマアマアの成績でゴールする事が出来た。もっとも倉知さんは、私の成績が自分に比べ10数分劣るのは年令差を考えてもケシラカンとすら思っているらしい。

大会後、和夫さんのパジェロ号は我々を大町エコノミスト村に連れて行ってしてくれた。ここでお風呂を御馳走になり、前日から同村の石教授宅に御世話になっていた学生二人をピックアップして大谷原に向かった。大谷原は上部のカクネ里や大冷沢の崩壊が更に進んでいる模様で治水工事が続けられており、行き慣れている和夫さんもとまどう程であった。ここで中村慎一郎のレリーフの位置を概ね確認したあと、倉知、柿原両先輩は帰京して行った。

我々はそのから20分ばかり歩いた大冷沢の河原にテントを張り、学生の作る焼き肉ライスを賞味して心地良い眠りについた。この夜は引き続き降雨があり、寝る前にちらりと見えた後立

の稜線は既に白かった。明け方には立山で8人が死亡すると言う事態が起こった事を後から知った。

翌9日は朝4時起床。起きてすぐ、テントをまくれば満天の星。ラジオによれば既に高気圧は本州上を移動中との事。一寸出発に手間取ったが朝日が輝くのを見たのは30分程歩いた西俣出合。赤岩尾根の取りつきだが昔の道より200m程上部に架けられた橋を通る新道が出来ていた。最初の1ピッチは私がしんがりを務めたが、どうしても私が遅れてしまう。次からは私がトップで歩いた。それでも快調なペースで高度を稼ぐ。高千穂平付近より紅葉と積雪が始まった。赤岩尾根の終点が爺の北面に繋がる部分は細い急傾斜で怖い。そこから冷乗越までは雪が深い。このあたりのナナカマドの赤い実はみごとである。冷池小屋では前日から極端な窮乏を強いられていた煙草を手に入れ一安心。

そこで、昼食の梅干し入りお握りの一つだけを食べ、いよいよ稜線に飛び出した。この朝の本州中部は全く雲がなく、南アは聖岳とおぼしき峰まで見わたせた。西は剣、立山の偉容があり東は奥秩父まで見えたが、恐らく私の現役時代も一度にこれだけの景観に恵まれた事はない

と思う。稜線上には初雪、初冠雪の翌日と言うのに雪庇の張り出しが始まっていた。あちこちで立ち止まりながら、南峰に着きバカチョンカメラで人物入りの景観写真を撮った。

この日の立山、剣の黒部側はとりわけ見事に雪化粧していたが、槍や穂高は未だ黒々としていた。小屋から南峰までの縦走路は多くの登山者により固められていたが、北峰方向の斜面は一段と雪が深く、一旦は歩き始めたもののすぐ引き返した。この時私の頭に「アイゼンが欲しいなあ」と言う言葉が浮かんだが、この言葉が細野君の事故報告書にあったのを思い出したからである。南峰直下、信州側の緩やかな無風の斜面で昼食を取り、下山にかかった。途中冷池小屋で翌朝のタクシーを大谷原まで予約し、赤岩尾根を下った。朝と違って高千穂平より下の雪はほとんどなくなっていた。

テントに帰着できた時はやはりホツとした。学生がカレーライスを作る間に河原から流木を集め、夕食は焚き火を囲んでのものとなった。和夫さんから差し入れとして戴いたバーボンは前夜は登山前と言うことで学生には紅茶に入れただけだったが、この夜はその残りとして私が持参したスピリッツで盛大に飲んだ。酒が入ると歌

いたくなるのが私の習いであるが、歌集もないので一人だけで気分良く歌ってしまった。当たり前の事かも知れないが、学生達が山讃賦さえ知らないにはガツカリした。私にしても歌えるはずの昔の愛唱歌の歌詞がなかなか出て来ないのは残念であった。

思えば学生といっても私の長男より、5才年上なだけである。彼我のギャップが深いのも仕方あるまい。8時にはねむけも来たのでテントに引き上げた。

翌朝は少し寝坊をして、テント場を出たのは既に日が高くなってからであった。大谷原に戻って荷物を置き、いよいよ第3の目的に取り掛かった。中村慎一郎のレリーフ訪問である。8日夕方に目星を付けておいた大川沢を渡り、目印の営林小屋を見付けた。俵さんに電話で聞いた通り、そこから10分程歩いたあたりで山道から10メートルばかり沢側に寄ったあたりを藪こぎしてみたが、なかなかそれらしきところが無い。2時間ばかりかけたが、結局あきらめてしまった。後から俵さんに聞いてみたら、結構いい線まで行っていたらしい。もう一押しが足りなかったようである。出発前にもう一度話しを聞いてみる積もりであったのを忘れてしまい、

基本的に自信がなかったせいである。

こうして今山行の目的の一つは遂行できなかったが、総じて大成功であったと自負している。なにより第一の目的であった快適な山登りが出来たこと、学生には今後の部活動を如何に進めるかなどの話しは出来なかったが、何かを感じ取ってもらえた、と思っっている。

来年もマラソンには出場する積もりであり、10月初旬の後立はアプローチ、地の利(今回は石ゼミの旅行と重なったため駄目だったが、エコノミスト村がある)、気象条件と私にはピッタリである。尚、エコノミスト村には今回、倉知、柿原さん達の尽力により、山田亮三山岳文庫が創設された。つまり約千冊に及ぶ山田さんの蔵書が御遺族の御好意により、寄贈されている。

追記

俵さんが書かれたレリーフの位置略図を添付する。

この岩の存在には私も気づき、良くチェックしたつもりであったが、見逃したらしい。会員諸兄が近所を通られる時には是非立ち寄って欲しいと思う。

会務報告

平成元年度総会は、六月二一日如水会館けやきの間で開催されました。

吉沢先輩の御挨拶の後、議事に入り、審議、承認された事項は以下のとおりです。

一、昭和六三年度 活動報告

(1) 懇親山行

棒の折山（六月三日 参加者十二名）

(2) 会合

イ、評議員会（六月二二日）

ロ、総会（六月二九日）

ハ、拡大幹事会（十二月十三日）

OBと学生の交歓会を兼ねる

ニ、新年会（一月十九日）

ホ、幹事会（六月六日）

(3) 出版物

会報（第72・73号）

二、昭和六三年度決算報告（後表）

三、平成元年度 予算（後表）

四、平成元年度役員および幹事選出

(1) 会長 石井左右平

(2) 副会長 石原 脩

(3) 評議員

岩崎利一、根本大、小林茂雄、

樋口洪、石井左右平、田中一雄、

笠原広信、石原脩、甘利仁郎、

上原利夫、倉知敬、加藤正己、

松尾信孝、藤本敏行、浅田充、

松田重明、岡部寛史

(4) 幹事

代表幹事 西牟田伸一

総務幹事 兵藤元史、中西茂

会計 稲毛尚之

会報 近藤泰、宮下克彦

山行 前神直樹、米田篤裕

学生担当 加藤博行、斉藤誠、

岡部晃和

保険 稲毛尚之

部室改築担当 西牟田伸一

(5) 監事

山本健一郎、竹中 彰

(6) 新入会員紹介

外池 武司、高橋 弘行

イ、夏の山行（九月）

ロ、冬の山行（三月）

(2) 会合

イ、評議員会

ロ、総会

ハ、忘年会もしくは新年会

ニ、幹事会

ホ、学生合宿報告会

(3) 出版物

イ、会報（二回発行予定）

ロ、針葉樹会会員名簿（秋出版予定）

ハ、如水会会報投稿

六、一橋山岳部

昭和六三年度山行報告および決算報告

平成元年度活動方針報告および予算承認

（お知らせ）

(1) 高麗山山行

近藤先輩の御先導による日帰り山行。

（別途山行会幹事よりご案内いたします。）

(2) 針葉樹小集会の開催

山行の打合せ等に御利用下さい

世話人 久保先輩（総務幹事 中西 茂）

針葉樹会昭和63年度決算報告

1. 一般 (63.6.1~1.5.31)

収 支 計 算 書

(円)

支 出			収 入		
		(63年予算)			(63年予算)
会報発刊費	308,000	360,000	納入会費	958,000	1,000,000
総務費・雑費	37,600	100,000	雑収入	43,317	1,000
山岳部活動補助	250,000	250,000	前年度より繰越	641	641
学生保険料 (基金へ振替)	33,000	70,000	利息	1,868	
通信連絡費	150,000	200,000			
その他	50,000				
次年度へ繰越	175,226	21,641			
合 計	1,003,826	1,001,641	合 計	1,003,826	1,001,641

支出 会報発刊費 針葉樹72号 154,000円, 73号154,000円 (予定)。

通信連絡費 72号発送費は38,000円 (予定)。

その他は故中村氏御遺族寄付金50,000円が前年度に一般会計に入ったのを遭難対策基金に振替。

山岳部活動補助：使用明細は学生会計担当より報告。

収入 納入会費のうち日本橋494,000円が今年度分会費。雑収入は新年会余剰金。

2. 遭難対策基金 (63.6.1~1.5.31)

収 支 計 算 書

(円)

支 出		収 入	
学生保険料	33,000	前年度分基金有高	3,552,006
細野君遭難対策費	609,407	近藤氏御寄付分	1,000,000
当年度基金有高	4,095,576	故中村氏御遺族寄付金	50,000
		利息	102,977
		学生保険料 (一般会計より)	33,000
合 計	4,737,983	合 計	4,737,983

支出 運用：(ワリサイ)

細野君遭難対策費：内訳は遺体搬送費約300,000円、派遣交通費約90,000、富山県警他謝礼約100,000円、御香典・花代120,000円

針葉樹会平成元年度予算案

1. 一般会計(1.6.1~2.5.31)

収 支 計 算 書

(円)

支 出		収 入	
会報発刊費	350,000	納入会費	1,000,000
総務費・雑費	80,000	前年度より繰越	175,226
山岳部活動補助	250,000		
学生保険料 (基金へ振替)	48,000		
名簿発刊費	150,000		
通信連絡費	220,000		
次年度へ繰越	77,226		
合 計	1,175,226	合 計	1,175,226

2. 遭難対策基金(1.6.1~2.5.31)

収 支 計 算 書

(円)

支 出		収 入	
学生保険料	48,000	前年度基金有高	4,095,576
当年度基金有高	4,215,576	利息収入	120,000
		学生保険料(一般会計より)	48,000
合 計	4,263,576	合 計	4,263,576

運用 ワリサイ (日債銀)

一橋山岳部の現状について

西牟田 伸一

一、はじめに

会員諸氏には学生の方から別便にて報告した通り、本年7月27日にC・Lの内藤君が小川山でフリークライムの訓練中転落事故を起こしました。内藤君は当初心配された後遺症もなく、10月からの新学期には元気な顔を見せてくれます。

事故直後から、山岳部長の石教授より「人命尊重を考えれば山岳部を廃止せざるを得ない」と言う提案が出されています。本件は基本的には石教授と現役学生との間で解決されるべき問題ではありますが、針葉樹会としても会の今後を左右する重大問題でありますので、これまで会長、副会長、評議員会長、幹事会、若手OB、学生で討議を重ねて来ました。

本稿ではこれまでの討議で各方面から出された意見の紹介をし、会員諸氏の御理解を深める一助と致したいと思えます。

なお現在の山岳部の構成員は内藤CL(3年)、山内(3年)、坪井(2年)、天羽、古田(1年)、井上(4年)であり、鮎沢(7年)は今春退部しております。

従って、来春より実働部員は3、4人になる見込みです。

また、現在の山岳部は10月に出された石教授の方針に従い、「ある一定の期間が過ぎるまでは部としての山岳活動を禁止」している状態です。(この方針は前部長である勝田、南両教授と相談の上出されたもの)

二、意見紹介

(石教授)

この何年も考えて来た事であるが、今の実態は目に余る。(昨年夏の細野君の遭難事故反省会の席上でも警告されている)その要点を個条書きすれば、

技術、装備の革新による山岳部の存在意義の低下

学生気質の変化(個人中心の時代、山以外の楽しみが増えた)

部員の少数化

実力の低下、将来事故の再発は確実

他大学で発生している遭難者遺族による大学提訴

(学生)

* 昨年の事故以来活動に制限がついた。そのためのレベルダウンを恐れて焦りがあった。

* それでも一橋山岳部を通じての山登りは続けたい、と皆が思っている。キッチリした訓練を受けられる唯一の場所と考えるからである。

(OB)

〈山岳部の将来悲観論〉

* 時代は変わり、情報も知識も装備も海外の山も手軽に手にはいる時代、従来のやり方組織を保ち、全ての伝統的な活動を学生に期待するのは無理かも知れない。

* 現役の、特に指導する立場の上級生の人数に限られており、それに代わって下級生を指導するべき若手OBも数が足りない。このままの状態では何時次ぎの事故が起こっても不思議はない。

* 石教授はこの20年の間実質的に山岳部の責任者の立場にある。過去を知らない現役と現状を知らないOBとの間で孤立している。20年間御苦労さん、と言いたい。

* 昨年の事故以来、安全な山登りについて現役の間で相当議論があったようだが、その結果

が垂直の岩登りにつながったのは驚いた。最近の情報過多により、自分の実力を顧みず安易に取りつく風潮があるのではないか。小川山のようなゲレンデにはいろんなレベルのクライマーがいる。更に、トップクラスの技術レベルは以前に比べてかなり高くなっている。

また鮎沢君のようなベテランクライマーの話も聞いて、ヨセミテに短絡した。とにかく、気軽に考えを移行に移せる時代になっている。

* 昔と違って世の中にはいろんな楽しみ、やる事があり、山登りはその一部である。

従ってそのうちの一つのジャンル「フリークライム」なら「フリークライム」だけをやって良しとするのではないか。そして、その分野のなかだけで、何かでかい事をやりたくなる。

〈山岳部の将来楽観論〉

* 一橋山岳部の60年の歴史の中でも、オーション会、ヤロー会のような大勢の部員がいて、それぞれが好きな分野でのびのびと活動できたのは僅かな期間である。

* 人数が例え4、5人であっても考え方の質によつてはうまくいく。つまり、共通の目標、

求心性があれば良い。

* 現役諸君にまだ存続の意思がある以上はやらせてやりたい。現役が今回の事故原因について反省すべき点を反省するのであれば、ある一定の自粛期間と活動制限期間を設けた上で部の存続を支持したい。

この問題については針葉樹会員の中にも様々な意見があり、会としての意見の統一が可能とは思えないし、例え出来たとしてもその意見を一橋山岳部に強制する事はできないと思われまふ。しかし、会としては放っておける問題でもないので、1月の中旬頃、臨時の評議員会を開催し、現状の説明会及び意見聴取の会とする予定であります。

以下上記の意見をより分かりやすくする為

- (1) 石井会長による石山岳部長との対談メモ
- (2) 金子晴彦会員による「学生との交歓会報告」を掲載致します。

(1) 石井会長と石部長との対談メモ

89・8・10 於 国立

① 「朝シャン」と言った事が一般的になりつつある現在の若者世代と、山岳部というものとは相容れぬものといひ得る。

我々（石部長の年代も含めて）の山、山岳部といったものに対するイメージと現代の学生生活の環境との間に大きなギャップがある。これを大学内にいる部長として強く感じる。極端に言えば針葉樹会員の持つ山岳部なるもののイメージは今はないともいえるか。

② ヒマラヤ、そしてヨセミテといった指向、これをやりたいのであれば個人で、あるいはその仲間を募ってやれば良い。それは自由だ。しかし、これらのアイディアに至る考え方、これは山岳部としてのそれではないと思われる。

③ 現在の当事者の特異なケースかも知れないが、今回の学生はヨセミテ行きが主眼であり、そのトレーニングのために夏山合宿に参加しない事になっていた。これが山岳部であろうか。

④ こうした事は今の部の幹部だからこうなのだという事かも知れないが、そう考えるより①で述べた一般的傾向として捉えるべきだと思う。

⑤ このまま行けば、事故再発の可能性が強い。新入部員を強引に勧誘する。彼等の気持ちを引きつける為にも二年目位には実力もないのに、所謂派手な山登りにトライするようになる。

⑥ 昨年の遭難、今回の事故、共にリーダーあるいはそれに近い学生に生じた。だからそれぞれの学生の家庭も止むを得ぬ事と受け止めているかも知れないが、もしこれが新入部員あるいは2年生位のものでリーダーがついて生じたとすると現在の風潮では訴訟問題という事も充分起こり得る。

（このような心配を代々の部長として持ちながら部を続けるということには耐えられない）

⑦ 生命に関することを簡単に考えたくない。

（石井会長記）

(2) 学生との交歓会報告

7月の事故以来謹慎状態にある学生諸君が一体どのような状態にあり、何を考えているかを、なるべく多くの若手OBに知ってもらうため11月23日、国立においてOB対学生のソフトボール大会を実施しました。この時の報告及び感想を書くことにします。

集まったのは全学生6人、OB10人（内7人がソフトボール参加）。9回戦を戦いましたが試合の結果は8：4とOBの勝ち、なかなか現状打開の道の見えない学生諸君はやや元気がないなどという印象でした。特に3連続三振をした某

君の心中は思いやられます。

気持良く汗をかいたあと部屋にもどると、学生諸君がオデン2鍋、海草サラダ4皿等々をしつかり準備してきてくれて、月見の宴もどきの宴会が始まりました（会費、消費税込み3100円）。国有財産の中での唯一の私的(?)に認められている部室の中はさすがに整頓されていましたが、頭の上に部屋をグルリと取り巻くようにして揚げてあった遭難物故者の10枚ばかりの写真までが整頓されて姿を消しているのは驚きでした。どうしたのかと聞くと、もう大分前にあるOBが持ち去られた由、相応のお考えはあっただろうが白じらとした壁を見ると、これは戻していただかざるを得ないと思われました。宴は例年の月見の宴とは違ってやや重苦しい雰囲気は否めません。集まったOBは基本的にはかつての山岳部での活動が自分にとって意味があったと考えていることから、安全に、しかもはつらつとした活動を再開する糸口が無いものかということとで学生の考え方を聞くこととする。他方、学生、特にリーダー層はそうした活動を実践するにも自分達の経験は少なく、それを補うための方策（OBの実地指導。他大学山岳部との協同活動。コーチ導入等）も様々考えたが

実効性が無いということから、謹慎という中途半端な状態を続けていたずらに時間を過ごしても意味が無いのではないか、活動限界を設定して再開するか、いつその時点で廃部にしてもらうかどちらかはっきりしてほしいといったスタンスでした。

現役がいてOBがいる。活動内容は全く別でも、そうした時系列を内包したクラブという組織においては単なる行動理論ではなく、いわゆるノスタルジーというものも重要なファクターであり、議論の骨格はどうしてもこの二つのかみあいにくいポイントに収束してしまうのです。

このポイントを中心としてさまざまな議論がなされましたが、昨年の剣の死亡事故以来、自分達の能力と希望に忠実であれとの指針に則り、検討を深めていった結果、フリークライムという領域が浮かび上がり、それを突き進めていくとした結果今回の事故になってしまった。従って、当初の指針には間違いがあったのではないか。むしろ、山岳部としてなすべき義務とでもいったものを設定してそれをまず実践することがいつに変わらぬ指針ではないのか、今ではそう思っているという学生の言葉は重いもので

した。

OBとしては学生のフリークライム指向は極端に効率的な山の楽しみかたとして出てきたものと考えていたのですがやや違ったわけです。むしろ、今では組織的登山の必要性を認めつつその実行の方途が無いという思いがあるようなのです。これは、居合わせたOBにとっては突破口になるのではないかと希望を抱かせる発言でした。ところが問題は、そうした要請を満たすような合宿が組めない、組んでも必要な訓練をするに十分な経験がない、そこで義務は分かっても実行上悩まねばならないジレンマに陥る点なのです。

4時間ばかり話をしましたが結局結論が出たわけではなく、その代わりに次のような提案をOBからしました。

① 現在は無駄に時間を過ごしているわけではない。謹慎4カ月にわたっているが、こうして1年生2人を含む学生が集まったことだけでも意味がある。もしこうした集まりが持てないのであれば、それもまたそれなりの意味があらう。

② 従ってこの状態を3月頃までは続け、そこでの現状を点検して、その後の方向を考え

てはいかがか。その間学生は町の山岳会に入りたいのであればそれを試すべきだし、それ以外の考えも検討を深めるべきだ。③ただし、OBと学生の接触は必要であるところから、今回のソフトボール大会でも良い、こうした接触の機会をOB側から出来るだけ提供するようにする。但し強制は一切しない。具体的には。

a、正月雪中登山
b、1月末大井埠頭20kmマラソン
c、3月上旬スキー登山
d、3月下旬武田の里20kmマラソン
したがって、当面は学生は正月とマラソンを

目指して鍛錬をするか、あるいはそれはもういやだから部はやめるかといった選択をすることになるでしょう。これに加えて、例えば1カ月に一度土曜日にも国立での合同トレーニングでも作るかと行ったアイデアもあります。山と一緒にでかけて実地に指導出来ればもっとも望ましいでしょうがそれは不可能とした上で代替の方法は何かと考えた次第です。ご趣旨賛同いただき、ご参加願えれば幸いです。西牟田までご連絡下さい(283-4597)

(金子晴彦会員記)

編集後記

・昨年7月に会報第73号を発行して以来、半年ぶりに第74号をお届け致します。

本号発行が遅れましたこと、会報担当の怠慢であり深くお詫び申し上げます。

・さて、「針葉樹会」は会則を紐解くまでもなく、一橋大学一橋山岳部OBによって構成される団体ではありますが、その山岳部では一昨年の剣岳の滑落死亡事故、昨年の小川山の墜落事故等重大な遭難が相次いで発生しており、今後の運営方針につき様々な議論がもたせられています。

また、一方では他大学山岳部と同様に当学生山岳部も部員減少により、現実的にもかなり活動に制約を受けており、まさに一橋山岳部は存廃の危機にさらされていると言ってよい状況にあります。

この辺りの状況については本号に詳しいのでありますが、いずれにせよ事は単純ではなく引き続き評議員会、幹事会、或いは学生山岳部と

の意見交換会等を通じ、今後の一橋山岳部の進むべき道を模索することになろうかと思われませんが、会員諸先輩の方々にも是非とも幅広くご意見を賜りたく、前広にご投稿をお願い致します。(次回会報発行予定は3月/4月ですが、一橋山岳部の問題につきご寄稿多数の場合は、繰り上げて発行致します)

・昭和45年卒・宮武幸久氏の自宅住所が、「会員名簿」に漏れておりましたので以下ご連絡申し上げます。

〒465 名古屋市名東区一社3-31

一社東団地 二〇二一

・山々が最も厳しくて、美しい季節、 \langle 冬 \rangle です！皆さん体を鍛えて山に登りましょう。そして今年一年も楽しい、充実した山登りができますように。

(近藤 泰記)

